



TITLE:

序言

AUTHOR(S):

帯谷, 知可

CITATION:

帯谷, 知可. 序言. CIRAS discussion paper No.69: 社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 1 2017, 69: 3-4

ISSUE DATE:

2017-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228858>

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

序言

本ディスカッション・ペーパー『社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 1』は、京都大学東南アジア地域研究研究所CIRASセンター（2016年12月末まで京都大学地域研究統合情報センター）の共同研究・相関地域研究プロジェクト「秩序再編の地域連関」個別ユニット「低成長期の発展途上諸国における政治経済社会変動の地域間比較研究」（代表：村上勇介）傘下で活動した中央アジア研究グループの2016年度の研究成果として刊行するものである。

この研究グループのコア・メンバーは、帯谷知可（研究グループ・リーダー）、宗野ふもと、中村朋美、村上薫、和崎聖日から成る。イスラームとジェンダーという観点から、ソ連体制下の中央アジアにおける社会主義的近代化の実態とそのソ連解体後の現在への影響に着目しつつ、それらの孕む問題群を近代化の再考につなげる、今現在もグローバルな意味を持つものと位置づけた。その上で、ソ連解体後の中央アジアにとっての近代化の意義を問い直し、今日そして未来に向けて社会に共有されていく規範や価値観について検討し、さらに他地域を対象とする研究、とりわけ中東イスラーム地域研究に接合することが可能となるような論点を抽出することも射程に入れた活動を続けてきた。

本ディスカッション・ペーパーは2017年2月4日開催のワークショップ「中央アジアのイスラーム、ジェンダー、家族——旧ソ連イスラーム地域研究と中東研究をつなぐ」（プログラムは付録1参照、京都大学稲盛財団記念館にて開催）をもとにしたものである。ワークショップは新学術領域研究「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文科学の確立」（代表：酒井啓子）B01「規範とアイデンティティ：社会的紐帯とナショナリズムの間」（代表：酒井啓子）との共催によって実施した。ウズベキスタンの事例を中心としながらも、他地域を対象とする研究との接合の試みとして、現代トルコに関する報告を含め、中央アジア以外の専門家にコメントをお願いする形での開催であった。また、本ディスカッション・ペーパーには、2015年度に本グループのコア・メンバーを中心に開催した国際ワークショップIslam and Gender in Central Asia: Soviet Modernization and Today's Society（2015年12月26日、京都大学稲盛財団記念館にて開催）（付録2参照）に参加されたウズベキスタンのN.アズィモヴァ氏およびSh.カリモヴァ氏から寄稿していただいた英文論考も合わせて掲載することとした。

ここに掲載した論考について、簡単に紹介しておく。まず、帯谷知可「20世紀初頭の帝政ロシアにおけるムスリム女性をめぐる議論についての覚書——N. オストロウモフ『ムスリム女性の権利の状況』（カザン、1911年）から」は、19世紀ヨーロッパのフェミニズムを取りこんだイスラームをめぐる植民地主義的言説を軸に、中央アジアの現在と過去を往還する試みの一環として、帝政ロシア時代に遡り、ムスリム女性の解放をめぐる議論の一端を紹介したもので、西ヨーロッパとロシア、ロシアの外側と内側のイスラーム世界における女性解放をめぐる議論の共振や、イスラームにおける根源的な男女平等という主張の存在を指摘している。

宗野ふもと「シャフリサブズ『フジウム』芸術製品工場について——ソ連期ウズベキスタンにおける手工業の集団化と女性の労働」は、ウズベキスタンにおけるソ連時代の共産党主導の女性解放によって「隔離」と「ヴェール」から解放され労働者となったウズベク人女性たちが手工業の社会主義的生産体制への改編にどのように組み込まれたかを、女性が主たる働き手となったある芸術作品工場を事例として探ろうとする試みである。

和崎聖日「マフルの是非をめぐる知識人のまなざし——1950-1970年代ソ連中央アジア南部地域における反イスラーム宣伝と現代」は、中東イスラーム世界においては婚姻において不可欠とされるマフル（夫が妻に支払い、妻の財産となる婚資）の慣行が現在ウズベキスタンで忘却されているのはなぜか、その経緯と要因、さらにマフルの是非をめぐるイスラーム的価値観とソヴィエト・イデオロギーとの相克に、具体的言説を通して迫ろうとした論考である。

N. Azimova and Sh. Karimova “Modern Uzbek Family and Marital Relations: A Case Study on Mindon Village, Ferghana Province”は、ウズベキスタンのフェルガナ州ミンドン村を事例として、ポスト社会主義時代の家族と婚姻の変容について現地調査とデータに基づいて明らかにしたもので、近年の（とりわけ出稼ぎ労働の増加などによると思われる）社会の変化に伴って核家族化が進むなど、家族の形や守るべき「伝統」・規範も変化しつつあることが示されている。

これまでの議論から、私たちの研究グループの活動をさらに進めるにあたって、歴史研究と現在研究を架橋し、また社会主義を経験したイスラーム地域と中東イスラーム地域の研究を接合するために、さしあたって「女性解放と男女平等をめぐる言説の歴史的展開」、「世俗主義とイスラーム法」、「移民とジェンダー・家族規範の変容」という三つのトピックを設定してはどうかと考えるに至った。こうした試みを積み重ねていくため、CIRASディスカッション・ペーパーにおいて「社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族」というシリーズを設定し、継続刊行していきたいと考えている。

2017年3月

研究グループ・リーダー

帯谷 知可